

横浜歌人会会報 第99号 — 第16回研究会特集

横浜らしい短歌を探る — 『アンソロジー横浜2009』から

横浜歌人会では、毎年研究会を開催しており、今年で16回目となります。今年は、「横浜らしい短歌を探る — 『アンソロジー横浜2009』から」と題し、シンポジウムを開催しました。多くの方々にお集まりいただきました。ありがとうございました。

◎日時：2010年6月26日（土）17:30～20:00

◎会場：かながわ県民センター 301 会議室

◎主催：横浜歌人会

◎シンポジスト：

- ・石川美南さん 「pool」[sai] 所属
- ・桜井健司さん 「音」「Es」所属
- ・角宮悦子さん 「はな」所属（横浜歌人会運営委員）
- ・中川佐和子さん 「未来」所属（横浜歌人会運営委員）

◎コーディネーター：

- ・吉野裕之さん 「桜狩」所属（横浜歌人会副代表委員）

「第一部」

長野義和 お集まりいただきまして、ありがとうございます。第一六回横浜歌人会研究会シンポジウム「横浜らしい短歌を探る—『アンソロジー横浜2009』から」と題しまして、ただいまから始めたいと思います。聞くところによりますと、気温が二八度以上にならないと、冷房が入らないということで、湿度は関係ないようなんですよね。もう少し暑くなると入るのですが、ちょうど微妙なところで、熱い議論で暑さを飛ばしていただければと思います。それでは、横浜歌人会代表委員であります千々和久幸から、ご挨拶申し上げます。よろしくお願ひします。

千々和久幸 皆さん、今晩は。千々和久幸でございます。ようこそ横浜歌人会にお運びくださり、ありがとうございます。このたびは初めての試みですが、昨年刊行いたしました『アンソロジー横浜2009』をテキストに、「横浜らしい短歌」を考えてみようということになりました。とは言えこのアンソロジーは、「横浜らしい短歌」という方向性のもとに作品を募った訳ではありません。したがって今回のシンポジウムのテーマは、苦し紛れの後付けということになります。いや案外その方が横浜の素顔が見えるということもあるかも知れませんが、そのあたりの面白さが出てくればと思います。



長野義和さん



千々和久幸さん

地名が存在様式にどう関わるのか、土地柄が歌人の生活の内実どんな影響を与えているのか。相互にどんな規定関係があるのか。堅苦しく言えばそういうことになりましょうが、作品を通じて横浜という符号の意味するもの、さらには横浜への愛着、郷愁、魅力といったものを探っていたければ幸いです。

その土地にはその土地固有の匂いがあり食べ物が、あり、人情があり気質があり、風習があり遊びがあり、そして言葉があります。そんな横浜固有の文化が短歌にどううたわれているか、この機会に考えてみたいと思います。

シンポジストの紹介を含めて、この会の進行のいつさいをコーディネーターの吉野裕之さんをお願いしております。よろしくお願いいたします。

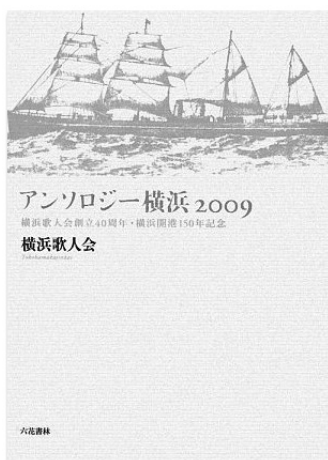
吉野裕之 横浜らしい短歌を探る。なんでもないようですが、なかなか難しいテーマです。外人墓地、マリントワー、中華街などの固有名詞。海や外国人、あるいは明るさや広がりなど、横浜がもっているイメージを感じさせる言葉。さらには対象の切り取り方や韻律などの姿かたち。短歌に見られる横浜らしさにはいくつかの相があると思います。しかし、今日のシンポジウムはこうした理論的な整理が目的ではありません。実作や鑑賞、評論に役立つような話し合いをしたいと思っています。さらにいえば、こうした議論を通してこれまでの横浜らしさを相対化させることもできるかもしれません。いわば、イメージの転換、あるいは再発見。むしろこれも、それ自体が目的ではなく、たとえばイメージの転換を図ろうという試みが、新たな作品のつくり方、読みのあり方を提示してくれるかもしれないということです。いずれにしろ、横浜らしさの表現とは、作者の

横浜に対する愛着を示すもの。それはとても素敵なことだと思っています。

本日は四名の個性的なシンポジストをお迎えしています。横浜歌人会の会員から二名、会員以外の方二名、いずれも横浜にお住まいの方です。若手、中堅、ベテランと、世代的にも多様な方々です。まず桜井健司さんをお願いしたいと思います。

桜井健司 「横浜らしい短歌を探る」というテーマで、『アンソロジー横浜2009』の作品世界について、主にレジメに採り上げさせていただいた作品に添いながらお話をさせていただきます。重なり合う部分はあるかとは思いますが、うたわれている作品世界の主題を「歴史」「風土・風景」と便宜上区分してみました。

まず、一首目、「ひろからぬ中庭占めて繁りたつ玉楠の木に寒き雨ふる」（青田伸夫）。日米和親条約締結の地にある玉楠の木がうたわれているわけですが、横浜開港の歴史へ思いを馳せている作品です。二首目、「ペリー上陸以後五十年ヨコハマ村日本の文明開化を担ひき」（助川信彦）。幕末から明治にかけて、日本がまさに変わろうとする開港、それ以降の歴史に対する思いを表現しながらも、感慨を必ずしも強く表立てることなく、歴史の姿そのものを中心にうたっています。開港をモチーフに据えた歌は、開港というイベントそのものが、作者が直接体験したこととは異なり、すでに遠方に退いた歴史ということとも関係しているのかもしれませんが、作者の主観を後方に沈めた作品が多いように思われます。三首目、「めずらしく雨降る今年の五月二十九日空襲の日は晴天だった横浜大空襲」（石田幸子）。戦禍に巻き込まれた作者の直接体験がモチーフになっている作品でしょう。他に、「B29横浜に500機来



『アンソロジー横浜2009』（発行=六花書林、発売=開発社、発行日=2009年6月2日、定価=本体1905円〔税別〕）：相沢一男、青木梅代、青田伸夫、朝井恭子、井澤幸恵、伊藤宏見、伊藤美枝、池谷しげみ、石田恵美子、石田幸子、磯幾造、板倉千鶴子、上木彙葉、小川俊子、小野政男、岡嶋悦野、岡部桂一郎、角田三苗、片野浜子、金田祐子、河北笑子、木村千鶴子、草柳繁一、小島熱子、小寺敦子、小林愛子、郷原艸夫、佐久間裕子、佐波洋子、斉藤要三郎、清水鉄次郎、清水八千代、塩野崎宏、篠崎和子、芝谷幸子、柴田昌子、助川信彦、鈴木育子、鈴木栄子、鈴木和江、関口満津子、田谷幸子、田口玲子、田代弥生、田之口久司、高尾文子、高橋みずほ、高橋庚子、俵谷晴子、千々和久幸、塚田キヌエ、角宮悦子、鶴田佐智子、鶴見典子、寺畑多都子、中川佐和子、中川宏子、中込カヨ子、中村節子、中村規子、永平緑、長沼芳江、長屋雅子、西登喜子、沼波万里子、野崎美智子、野々山三枝、長谷川静枝、間ルリ、蓮本ひろ子、早島和子、林静峰、原昌子、日野原典子、平井郁子、平野久美子、廣瀬美枝、深志聖子、藤田絹子、藤村聡子、堀部知子、本多豊明、真鍋正男、松井芳子、松本紀久子、松本嘉猷、丸山美寿子、森藍火、森田もと子、矢野豊子、柳澤美代子、山形裕子、山本登志枝、結城千賀子、吉野裕之、渡辺暁男、渡辺謙

襲のたちまち火の海なりしは六十五年前」など（片野浜子）。空襲の惨状をうたった歌も決して落とすことはできない。作者は作品のなから消えてゆくものや、作者自身が若い頃にあった事件に介入したことが作品となっている。そういったことも一つの歴史、風土のもつ歴史というものを反映させている作品として取り落とすことはできないと思います。四首目、「一面の焼野原となりし伊勢佐木町 戦後ブルドーザーの走りぬたりき」（蓮本ひろ子）。また、「親不孝通りとよびき 小さき呑み屋軒をならべしかの裏町を」「親孝行 親不孝など死語ならずまだ市民権もちぬし時代」など、伊勢佐木町を舞台にしながらか戦後の風俗という時間軸のなかで、それが現代の批判へと展開されてゆく面白さがある歌ではないかと思います。五首目、「港湾の荷役を仕切りし義父在さばみなと未来は夢と映るか」（石田恵美子）。過重労働、今の重労働の象徴といっているようなもので、開港からだけに彩られている街ではないことをいう。「みなと未来は夢と映るか」と、その港湾の地に現在とはみなとみらいに代表される高層ビルが林立する、新しい都市空間として目の前にある。時代のギャップを身近な方を存在として記誦する。疑問形で必ずしも現代の風景を手放しで称賛するのではなく、どこか批判的なスタンスを垣間見せる、作者の姿勢が反映されている歌ではないかと思ひ読みました。六首目、「老夫婦の洋品店あり野毛町に店番の爺の耳の遠かり」（清水八千代）。古い商店街の変わらぬ風景で、非常にノスタルジーを感じさせる一連ですが、現代の都市空間と対極に存在する野毛町の古い商店街。時代に取り残されてしまったような古き良きものに対する、ある種の心の結びというものが込められている。七首目、「野沢屋より受け継

ぎし灯り消されゆく横浜松坂屋の閉店をしむ」（長谷川静枝）。時代の流れにはからずも消えてゆくもののへの愛惜の念、一つの思い入れというようなものがテーマとして、横浜の記憶として捉えられている。八首目、「漁師町の面影あらぬ生麦は深閑として午後に眩ゆき」（渡辺暁男）。生麦はむかし漁師町として栄え、現在はマンション等が林立する新しい住宅街に変貌しつつあるのでないかと思ひます。変化しないではないもんかと残念な思いがある。

そうして考えてみますと、一、二首目は、開港、幕末から明治の開港。三首目は戦争、空襲。四首目は戦後の風俗。五、六、七、八首目は、時間のなかで変わりゆく町へ愛惜の思いが込められている。このように成立するのではないかと思ひました。

つぎに、「風土・風景」として七首、みてゆきたいと思ひます。九首目、「汽車みちといふ道ありてみなとみらい海沿ひに過去の軌条をのこす」（早島和子）。過去の、鉄道の軌条の場面をうたう。現在の風景のなかに突如現れてくる過去の姿。日常としての面白さや新しい都市にも長い歴史を抱え込むという、横浜の都市が醸し出す歴史の姿が見えてくると思ひます。十首目、「みなとみらいの花火が過ぎて妹の六か月目の命日がくる」（松井芳子）。みなとみらいの行事に肉親の方の命日、鎮魂の思いを綴る。その対比のなかで、みなとみらいが統一されている。いわばみなとみらいという、花火大会というのが季節性をともなった、ひとつの風物として捉えられている。そこになにか土地行事としてある種の郷愁、思いという、亡き妹さんへの哀悼の思いといるものが浮かび上がってきている。横浜らしさといわれると少し違いかもしませんが、固有の土地に対する愛着のようなものが感じられると思ひ

ました。一一首目、「対岸にめぐるる大観覧車ゴンドラは白き雲に触れゆく」（結城千賀子）。他に運河、河岸、波止場など見えますが、横浜という語句、特定の場所が出てこないにもかかわらず、横浜を主題とした一連に感じさせているのではないかと思ひます。一二首目、「坂道の四方にのびるこの町の基点のごとし青葉台駅」（佐波洋子）。港、海のイメージではなく丘陵地帯、丘の横浜をモチーフにした作品で、いわば緑の横浜、坂の横浜をうたっています。一三首目、「ヨコハマもあつちの外れ都筑邑 都筑に越せば場末ホンモク」（斉藤要三郎）。「あつちの」と口語的な表現が軽妙で重厚さを拒否し、あえて軽やかにうたう。港横浜とは違った風土という都筑に焦点を当て面白く思ひます。一四首目、「星垂るる宵へと沈むわれとわが螢さがしの保土ヶ谷の谿」（野々山三枝）。現在の歌か過去のか判然としませんが、港から離れた場所でも螢が存在している、もう一つの横浜の顔をみる作品と思ひます。一五首目、「除夜の汽笛とどかぬ家に移りきて何か足らはぬ大晦日なり」（田谷幸子）。以前は毎年除夜の汽笛を聞くことで新年を迎える心の準備をする。横浜の祝賀行事が、作者の心に一体化して存在していたが、転居し、聞こえなくなった、そのもどかしさを感じる作者が見えてくると思ひます。

私は横浜らしさとはどういう感じなのかと考えてみましたが、変化するもの、しないものと書き出ししておいたのですが、開港以来の歴史のなかで、変化をとげてゆくものに対する一つの関心を示す傾向があるのではないか、変化への強い関心、思いがある。また、逆の意味で変化をとげるものに対する関心、時代の流れに変化せず取り残されてゆくものに対する一つの作者の心の結びというものに、そういう姿

勢が込められている。みなとみらいが未来へ向かい明るく広がってゆくものの象徴とすると、伊勢佐木町という繁華街は、時代のなかで古いものを守りながらそこに存在する。港に象徴される、海の青さがきらびやかに光っている横浜。場末本牧に対して、はずれの都筑に代表されるもの、ちよつと田舎というか、あるいは丘陵地。港横浜、丘陵横浜という対視点のなかから変化に富んだ姿をうたっている方がいらつしやることを一つ指摘しておく必要があるのではないか、新しいものと古いものとが共存する横浜の姿をうたっている方がいらつしやることは、特徴として捉えてもいいのではないか。今回、時代のなかの横浜という私の関心事からアンソロジーの作品を捉え、私はそんなふうに感じる次第です。

吉野 一首一首非常に丁寧に鑑賞しながら、横浜のいろいろな側面をご指摘いただき、最後に変化するものへの関心、あるいは思いというものをそれぞれの作品に見ていただきました。

確かに横浜は港が開かれて大きく変わってきた街。港というのは人がきて、物がきて、情報がきて、そして出てゆく。中継地点なんですね。人や物が行き交うなかで、多くの変化がもたらされる。そうした横浜を、時代の流れを、具体の作品をあげて、お話しいただきました。

石川美南 私にとって、横浜は歴史があるけれども、新しい横浜でもあるというようなイメージがあって、そこから作品を抽出し、今回のレジメを作ってきました。まず、一つ目の項目『生活の場所』では、「坂道の四方にのびるこの町の基点の」とし青葉台駅（佐波洋子）。生活感のあるなかで、横浜の青葉台駅というものが前面に出てきているのが目を引く歌でした。「駅までの歩数がいつもやむやみになるのは

ここのお寺のあたり」（松井芳子）。駅までの距離感、歩くうちにだんだん歩数がわからなくなり、途中にふつとお寺があるという感じの、情景がともみえてくるという意味で、生活のなかに横浜が感じられる歌ではないか、アンソロジーに地元の寺社の歌が見当たらず、自然な形で生活のなかのお寺が出てくる珍しいタイプの歌じゃないかなと思います。

『港、観光名所』では、「赤レンガ倉庫の上の避雷針風の流れのとがる位置」（高橋みずほ）。赤レンガ倉庫の風景をうたった歌で、自由なリズムと相まって横浜の洒落な感じが、切り取られた歌ではないかと思います。「アムステルダム」英字に記し白き船泊て港は異国への窓（結城千賀子）。横浜という言葉を使っていないのに、横浜の港のおしゃれな感じが、とても一首のなかから漂ってくると思います。

『思ひ出の場所／街の歴史』では、「仕事が切れ泥棒以外は何でもやった、／荷揚げ人足——／“赤レンガ”でも。」（清水鉄次郎）。昔の赤レンガのようすを、この捨て鉢な、かつこい文で、とてもうまく切り取っている歌ですね。「明治期の水汲み上げて（サイダー）」の材料とす川に残り鴨浮く（上木葉）。明治期からの水がサイダーになっいて、しかも汲み上げられた残りの川に鴨が浮いている、ユーモラスな味わいが魅力的で、いま飲まれているサイダーと明治期から続く歴史とが、どこかでつながっているという意識が透けて見える歌だと思います。つぎに、「大硝子戸俯瞰図にみればつぼつと街の人生が灯り始める」（木村千鶴子）。いま目にしているものの、俯瞰図の向こうに街の歴史まですべて見渡せるような、そういうところをうたった歌だと思います。

今回、開港一五〇年記念ということもあるのかもしれないませんが、やはり歴史観は、一五〇年前より前には遡らないことも印象に残りました。いまの横浜らしさが生まれたのは、横浜の開港以降という意識がわりと共有されているのかなという気がしました。

その一方で、『変わりゆく風景』をうたった歌もとても多く、「手作りの豆腐屋消えし街角にシヨッピングセンターのビル聳え立つ」（田之口久司）、「整地されれば狭き土地なりみつしりと古本に充ちていたるあの店」（平野久美子）。これなども横浜らしさと、刻々と変わっていったという意識の上につくられた歌と思います。

風景が変わってしまうこと自体は、日本全国どこでも、同じようにすごいスピードで変わっている。東京について考えるシンポジウムにいったとき、東京らしさについても、風景が次々変わってしまう、更新されていってしまうという話がされていて、そういう意味では変わりゆく風景ということだけを取り上げて、横浜らしさとはいえないかもしれません。でも、横浜という場所は初めから、変化してゆくことも含めて、横浜らしさだったのではないかと思うのです。開港を合わせてみると、黒船がやってきて、外からきた者が、町を変えていったことが、ある種の歴史の始まりだったとか、もともとの港町というものの、流れ着いてはまた出てゆくというものが、横浜は宿命のように意義づけられているのではないかと思います。変化したり、外からやってきたりすること、横浜らしさのなかに入れてしまってもいいのではないかと、私は思いました。

それと関連して、風景が変わってゆくという一方で、自分も外から横浜にきたり、他へ流れていって



桜井健司さん



石川美南さん

しまうものだという意識が、ちらほら見受けられると思うんですね。『外からやってきた人たち／旅の途中』では、「つばくろが爽やかに飛ぶ この町を終の棲家と心に決める」（鈴木育子）。どこか他からやってきて、この町に住んだ人じゃなければ出てこない感慨なのではないかなと思います。「横浜の森を飛び交ふ赤星胡麻斑蝶放虫ゲリラの攪乱の果て」（真鍋正男）。赤星胡麻斑蝶という東アジア一帯に飛ぶ蝶が、横浜の森に放たれて、たくさん飛んでいる。異様なというか、不思議なイメージのある歌で、外からきたものが居着いて我が物顔をする、間接的に横浜らしさというところにつながるのではないかと思います。「夜行列車の車輪が接ぎ目にあたる音どこまでいつてもまつくらな音」（角宮悦子）。これは、旅行中の歌でよろしいのですか。

角宮悦子 全く違います。いろんなところで汽車の音を聞いていますが、一番印象に残っているのが、敗戦後、田舎に引きこもるときのもの。そういうのが事実としてあるけれど、イメージでつくることが多いので。

石川 よかった。私のイメージとあまり違ってなくて（笑）。夜行列車をうたっているようで、その向こうに人生そのものが旅の途中にあるように感じられました。

角宮 むしろ魂の旅という気持ちでうたっているの

で、そう受け取っていただけで、嬉しいのです。

石川 人生自体が旅という感覚も、鈴木さんの歌とほぼ通じるところがあつて、それが人を温かく迎えるという、横浜の街がもっているある種の力といえるのではないかと思います。「挿し木して父のことはを待っている四月の庭は広いと思う」（吉野裕之）。どっしりした、根付いたものとして親子の関係をうたうよりも、挿し木というところから庭をうたう。抽象的な表現で、自分の生き方、人生そのものが父との関係を含めて、旅の途中であるという感じがなんとなく感じられたので、ここに入れました。

『軽さ、洒脱さ』の項では、外からやってきた人がいるとか、変わりやすい横浜というイメージから、言葉の軽さ、洒脱さをどこかに積み重ねてきているのではないかと考えました。「立小便するなど書かれし札のありバンザイ さげぶその谷底へ」（岡部桂一郎）。立て看板のところで、バンザイと叫んでも、なんともいえない軽妙な、自由な感じにとっても惹かれました。「泡を吹く恰好をして先生の忍耐が沸騰点に近づく」（千々和久幸）。想像するだけに、怖いやら可笑しいやら、独特の軽さのようなものを感じました。「偽源氏へメールを返す夕ぐれ秋の噴水愉快に激し」（中川佐和子）。秋の噴水という寂しいようなものに対して、愉快に激しという評価をする、そこにおしゃれさというか、洒脱さを感じて、横浜のある種の風景の一つと思い取り上げました。

吉野 変化してゆくことを含めて横浜、あるいは横浜らしさというお話もありました。横浜のある本質をついたご指摘があつたと思います。面白いなあと思ってお聞きしていたのが、歴史を振り返っても一五〇年前の開港までしか遡らないという…。いまでこそこんなに人口も面積も大きな街になったので

すが、開港されたときには、現在の関内あたりの非常に狭い範囲が横浜だったわけで、当時の人々が見たら、現在の横浜は別物と思うのかもしれない。中川佐和子 このアンソロジー一冊には、二〇〇〇首ぐらいありまして、そのなかから一五首だけを選ぶのは、横浜らしさを一体どこにおくかを考えると、とても難しいところなんですね。

横浜らしさというものを考えてゆくとき、横浜を歌枕にして考えてゆくと、たとえば地名を取り上げる、その地名は文学的な何か力として、喚起されてくるものがあるかどうかを考えてゆく必要があるのではないかとこのことを思いました。また、横浜の歴史、地名、横浜のものをうたっているから、横浜らしいというのではなくて、横浜の風景とか、横浜の空気みたいなものを、じゃあ私たちはどうやってうたえたいかということをもったんですね。そして、うたい方としては、横浜に住んでいるわけですから、どのようなうたい方をしていけばいいか、どういう切り取りをしていけばいいか、横浜の味が出てくるかということも思いながら、一応、三つに分けたのですが、ちよつとその分け方というのもしくらか曖昧なままの形で分けてみました。

Iでは、「ジャズライブ定刻にある喫茶室マンドリンコーヒー飲みつつ待てり」（俵谷晴子）。「ジャズライブ定刻にある喫茶室」という切り取り方が、非常に端的でありながら、そこで横浜の何かについているものを掴んでいると思います。横浜のジャズライブっていうのは、昼間は喫茶室で、夜になるとジャズライブをする。日本ジャズは、横浜が発祥の地ですから、こういう歌に惹かれました。「一首目、「時計形のエレベーターの表示板つくづく見上ぐ過ぎ去りがたし」「路上ライブ『ゆず』の二人が大理石の

壁を背にして歌ひしところ」(長谷川静枝)。伊勢佐木町の松坂屋の前で「ゆず」はよく路上ライブを行っていて、その松坂屋のエレベーターは、階数表示板が丸い時計形になっていました。この松坂屋は、前は野澤屋といって、昔からとても有名ですね。「過ぎ去りがたし」という愛着の出し方と、時計形のエレベーターの表示板という使い方にやはり惹かれました。三首目、「海を見るただそのみに来し波止場ひと日の余白を船とほく航く」(結城千賀子)。この波止場に来て「ひと日の余白を」といううたい方をして、作者の気持ちのありようですね。そのところをこういうふうにうたっているところが大きいと思います。「ドラ鳴りて出航はなべておもおもし港内めぐる遊覧船さへ」(相沢一男)。この遊覧船というところはわかっているところなのですが、この「ドラ鳴りて」は、というその出し方にとっても惹かれました。「坂多きここはわが街風の町押されてわれも風となりゆく」(丸山美寿子)。横浜ですから、坂の多い町として非常に多くうたわれるのですが、それをどううたってゆくかなんですね。「押されてわれも風となりゆく」に、坂の多い町を作者なりに捉えていると思いました。



中川佐和子さん



角宮悦子さん

IIには、うたい方として惹かれたものをあげました。「降る雨をゲリラ豪雨と報じいる乗り換え電車の電光掲示に」(塚田キヌエ)。「乗り換え電車の電

光掲示に」は、いかにもある一つの風景、光景なんです。こういうふうにパッと捉えて、ある都会的な、一つの都市詠、それがとてもうまくいつている。「真昼間の往来に並ぶ長き列 山積みのミニクロワッサンまで」(早島和子)。真昼間の往来のなかで、「山積みのミニクロワッサンまで」と、こういう目に浮かぶ具体的な使い方をされている。うたい方として、真昼間のミニクロワッサンという、存在感、手触りみたいなものがあると思うんです。「watching」といふ言葉あり隣家の犬ひすがらわれを watching する」(中村規子)。ユーモラスで、ウオッチングというウオッチングいう方をして、それが自分を見張っているように。こういううちよつとしたい方の面白さがあると思います。また、「花びらのような駱駝の足跡をたどりてサハラの日の出見に行く」(深志聖子)。ラクダの足跡というのを花びらのようなという捉え方をしてるんですね。日の出を自分が見に行く、こういう具体の歌、シャープな感じがこのなかにあって、とても私は惹かれました。やはりそのうたい方のなかに、作者の個性でもあるんですね。けれども、何かその切り取り方を、そこから立ち上がってくる雰囲気みたいなものを感じました。

IIIでは、「われが好く道路に馬車は走らねど旧正金銀行本店鎮座す」(塩野崎宏)。この旧正金銀行本店というのは、のちの東京銀行で、神奈川県立歴史博物館の建物でした。関内っていうのは、むかしの、銀行街がずらっとありまして、横浜の中心だったんですね。東京銀行が為替の中心で、三時ぐらいになると、みんな東京銀行にもってゆき、銀行の人たちがそこで決済をする。「本店鎮座す」といういい方に、やはり横浜の、これは風土とかに結びつく何かではないかと思いました。「横浜市緑区荏田に米軍

機ファントム墜つとその日知りたり」(鶴田佐智子)。これは、一九七七年に米軍機が墜ちて、そしてその事故で命を落とした母と子の像が、港の見える丘公園に建ったんですね、やはりそういった歴史を見ている目があると思いました。それから、「ランドマークタワーそびえるミナトミライむかし思えばとま屋の煙」(野崎美智子)。横浜の市歌のなかに、こういう下りがあるんですね。みなとみらいは、昔、苦屋の煙が立ち上がっているようなところで、一首のなかにある時間の長さが、やはりいいと思いました。みなとみらいをうたいながら、そういった時間をこのなかに入れて、時間の取り方、この辺はとも巧みだと思いました。つぎの歌は、「一面の焼野原となりし伊勢佐木町 戦後ブルドーザーの走りゐたりき」(蓮本ひろ子)。伊勢佐木町は、横浜の大空襲があつたところだと思ふのですけれども、そういった戦後の時間が込められていて、伊勢佐木町は明治六年ぐらいにこの名前になったそうですが、戦後ブルドーザーという、戦後の時間を見ている目の確かさを歌のなかに思いました。

「昭和四年の根岸競馬場の地鎮祭 わが家のテレビに映し出される」(廣瀬美枝)。この他に、一六ミリの映像をとったのをDVDに落として、自分のテレビに映し出しているという作品があります。根岸競馬場をうたって、なかなか歌にしにくいところですが、やはり横浜の歴史というものがあろうと思うのですね。「中華街中国製の地球儀に瘦せた日本ひよりろりと在りて」(森藍火)。中華街の中国製の地球儀なんですね。そこに雑然とした感じがあつて、そして日本が「ひよりろりと在り」と、その自然の大きさというの、歌のなかにあると思います。何か、横浜らしいというものをうたいながら、そ

こでどういふふうにするか、言語の空間みたいなものをどう広げてゆくかということは、とても難しいのですが、うたい方、切り取り方とか、やはり歴史的なものを見るときの自分の意識にかかわってくるのではないかと思いつつ読みました。

吉野 I、II、IIIの項目のキーワードのご説明を、もう一度お願いいたします。

中川 Iは、横浜の風景としてある空気みたいなものを、光景、風景というものをあげました。IIは、歌い方ですね。具体の歌で、具体のものとしてある切り取り方のものとして、このなかにあるのではないかと思いました。IIIは、地名とか、ある歴史とか、そういったものが現れているもの、固有名詞をあげました。

吉野 最後に、角宮悦子さん、お願いいたします。

角宮 私は横浜をいくつの頃、意識したのかなと考えたら、小学生ぐらいに「赤い靴はいてた女の子、異人さんに連れられて行っちゃった」という歌で横浜を覚えたと思うんです。それを読んで、何か恐ろしいけれど、遠いところへ行きたいという気持ちを植え付けられた気がします。ミステリアスな、港、海の彼方、そういう憧れ、少し危険とか、恐ろしいとか。そのつぎになぜか私は、淡谷のり子の「窓をあければ港が見える」の歌がわりと好きで、そっちの方の世界へ入っちゃいけないと思いつつも何か随分、少女時代からあの歌には心が引き込まれるようでした。港、海、潮風そういうものが、私を惹きつけていた。「赤い靴」「別れのブルース」は、私のなかにイメージが深く刻まれていたと思います。

港町は、神戸も、函館、長崎もありますけれど、横浜は違うような感じがするんですよね。横浜へ吹

く風というのが、独特の匂いがあるそれは、どこかバタ臭い、どこか甘い、そういうものが含まれているし、メリケン波止場の印象が強くて、アメリカからの風が横浜に吹いてくるような感じで、横浜を受け止めていたように思います。

さきほど、石川さんが、一五〇年前のことは歌になっていないとおっしゃって、確かに一五〇年以前の歌はないですね、こういう指摘をしていただいてよかったです。

最初に出てくるのが、「ペリー艦隊の書記は日記に横浜村垣根の椿赤しとするす」など（助川信彦）。「横浜村垣根の椿赤しとするす」が、とても印象的に心に残りました。蓮本ひろ子さんは横浜の生まれの方で、伊勢佐木町とか、野澤屋とか、郷愁の歌（二四六、七頁）として、とてもよくうたわれていると思いました。「炎天のカンカン虫は 虫の息、／逃げ場のない——／汗の蒸し風呂。」（清水鉄次郎）。このカンカン虫も、だんだん人々の記憶から消えてゆくような言葉ではないでしょうか。吉川英治に「かんかん虫は唄う」という小説がありますが、カンカン虫って、鉄の鎚で船の錆を落とす仕事ですね。「60年安保改定近かりき弁天橋付近に風太郎をりき」（塩野崎宏）の風太郎という、港にあった言葉もだんだん消えてゆくんじゃないか。そういう意味でうたい留めていたdakのは、大変いいなと思いました。横浜というのは、丘陵地帯、坂の多い町で、これは景色を美しく、横浜らしくしていると思うのですが、時代というものはいつもいいばかりではなくて、光と影の部分とがあって、若いときに丘陵に住み着いた人たちが、年を取ると丘や坂の上に住んでいられなくなるのが現実で、丘の上には空き家が多くなっていますね。これは何か、うつすらと寒い感じが

します。そういうのが、さりげなくうたわれている歌がありましたね。除夜の汽笛が聞けるようなところに住んでいたけれど、そこに住めなくなつて引越してゆく、それも横浜の影の部分じゃないかなって。そういうものも心に入れてうたつてゆきたいという思いがいたします。横浜はいい街で、みんなの憧れの街なのでしょうけれど、これからの都市生活で、高齢化とともにどのように私たちに影響を与えてゆくか、そういう影の部分を感じております。

それから、時というのはどんどん過ぎて、忘れ去られて消えていつて、だいたいみんなの闇の襷のなかに滑り込み、消えて思い出しもしなくなるんですよね。そういうことを考えたとき、アンソロジーはよかったなあと。そういうのは、ファントム事故をうたわれた、「入り海の水際に立つ母子の像うら若き母幼子ふたり」など（鶴田佐智子）。こうした歌を、同じ時代に出会ったものとして、できたらよん

横浜らしい短歌を探る。なんでもないようですが、なかなか難しいテーマです。



シンポジスト、コーディネーターの皆さん

でいきたいし、またこううたわれてみると、港の見える丘公園の、フランス山地区を散歩したとき、「愛の母子像」があるので、そこで足を止める。やはり短歌というのは、足を止める、動くだけでなく足を止める。足を止めるというのは、心を止めることですけれど、そして横浜を丁寧に見ていきたいと思っています。

それから意外に少なかったのが、横浜空襲で、大変な記憶として残っているのでしょうか、あまり辛いとよむ気がしないのかな。「めずらしく雨降る今年の五月二十九日空襲の日は晴天だった（横浜大空襲）」など（石田幸子）。「B29横浜に500機来襲のたちまち火の海なりしは六十五年前」など（片野浜子）。「一面の焼野原となりし伊勢佐木町 戦後ブルドーザーの走りあたりき」（蓮本ひろ子）。こういう歌がうたわれていますが、すてきな横浜と、影の横浜というもののへも心を運びたいと思います。

私は、横浜を案内するとき、真つ先に氷川丸を案内しますが、氷川丸は一首もうたわれていませんでした。あれこそ、横浜の戦争の形見のように係留されてありますけれど。まだまだ横浜のなかにはうたつていくもの、形が残されていると思います。私は、氷川丸のことを讃岐文子さんの遺歌集『氷川丸』（福島ペンクラブ五月会、二〇〇〇年）から知って、そのなかに、「人肉にいのちつなぎし南海のジャングル秘話をまた聞かされぬ」。氷川丸は、ニューギニアから、マニラから、サイパンなどから、兵士を拾うようにして、多くの人は捨てて、氷川丸で運んでいたわけですね。そういうのは、他所の人の歌集から知って、氷川丸というものが心に残っているのですけれど。戦争のあとが本当に消えてゆきそうなのに、それでも横浜市は、あそこに氷川丸を大切に

してくれているということ、横浜市にも感謝しますし、覚えておいていただきたいという気持ちがございます。

吉野 歴史というのは、そのときそのとき記憶されていって、しかし長い間に人々のなかから忘れてゆかれることも多い。貴重なご指摘のあった、氷川丸が一首もなかったということ、自然体のなかでつくったアンソロジーに氷川丸がなかったのは、何かを提示しているのかもしれない。

ひとりひとりのお話がミニ講演会のようになつて、非常に充実した厚みのあるお話で皆さんもお疲れになつていらつしやるかと思ひますので、一〇分ほど休憩に入りたいと思います。

「第二部」

吉野 では、再開したいと思ひます。会場の方々からご発言をいただきたいと思ひますが、今日は横浜歌人会以外の方々もご出席されています。まず、加藤英彦さん、お願いいたします。

加藤英彦 横浜らしさというのは、どちらかというとつくる側の視点ではなくて、あとでそれを読む側が、そこから横浜らしさを嗅ぎ取ってくるかどうか、横浜らしさをそこに感じられるかどうかという、読者の側の視点なんだろうなという気がしています。シンポジストの方たちのお話のなかにありました、地名、固有名詞などを入れるとか、ともすると絵はがきになったりする。枕詞というのもそうなんです、言葉が一つのイメージを共有しているわけですから、そういう意味では一般化されたものになつてしまいがちですが、今日あげられた歌を見ていきますと、そうではないのがたくさんあつて、この横浜らしさというのは、だれでもが横浜ら

しさを感じるの、横浜を知っている人たちに共有されている、横浜の生活臭も含めてその土地、風土に染み込んでいるものを読み取れる人たちに共有する、そんなような枠組みなのかなという気がしています。

歌が生きてくるというのは、言葉が決してその一つの記号、赤レンガ、みなとみらいなどの記号としてじゃなくて、やはり生活のなかから立ち上げていく強さなんだなという気がして、楽しく何わせてもらいました。出来上がった作品を、横浜らしさという角度から読み返してみたときに、また全然別の表情とか、味わいとか、いろんなものが出てくるという意味で、つくる側も読む側もいろいろ試される面白い企画だなと思ひました。

吉野 どうもありがとうございます。嵯峨直樹さん、いかがでしょうか。

嵯峨直樹 私は岩手県出身で、横浜にきてからまだ、四年くらいしか経っていないんですよ。うちの女房が、横浜の出身でして、吉野さんと同じ高校、部活も同じ将棋部でリアルタイムで当時の吉野さんを知っている後輩でした（笑）。横浜らしさというと、その都市空間よりも、心の面に横浜らしさを感じます。どちらかというと、他者に対して開かれている、他人の目を気にしない、新しいものが好き、ヤンキーである（笑）。みなとみらいを見るときよりも、横



加藤英彦さん



嵯峨直樹さん

浜的な心性を感じるときに横浜らしさを感じます。他人に対して開かれているとか、新しいものが好きとか。本当にそういった事を、妻とかかわっていると思います。

吉野 妻とかかわりつてというところ……(笑)。そのかわりつて、横浜らしさなのですか。

嵯峨 そうですね、私はその、シャイな人間なんです。あまり人とうちとけて話すのが得意ではない。こういう場でも話さない人間なのですが……(笑)。横浜出身の私の妻は、たとえばコンビニにゆくときも、襦袢どてらみたいなを着ていくんです。近所だからという理由で。人の目を気にしないのにもほどがある……。

角宮 絆纏？

嵯峨 そう、絆纏を着て、コンビニにいつていました。それ僕なんか、田舎の人間からすると信じがたい光景で。あとは、お爺さんたちが、そこいらの道にしゃがんで話し込んでいたり……、あまり他人の目を気にしないというのはあるんじゃないかなと思います。もっと他人の目を気にする条例があればいいのに(笑)。そんな自由すぎる感じがあるなあと、思います。

吉野 なんとなくわかります(笑)。港町というのは、いろんな人がくるし、いろんな人が出てゆくから、いちいち気にしていてもしょうがない、気にしたからといって意味がないというところもある。

嵯峨 融通性が高いっていうのもあるのですか。

吉野 そう、そうなんですよね。

野崎美智子 ちょっと、ごめんなさい。横浜って天領だったと思うのですね。殿がないんです。

吉野 え、殿様？

野崎 殿、殿様がいる城下町は、大変文化が発展するのですけれど、横浜っていうのは、まさに、

横浜村の農民、漁民、そういった人たちの集まりだったから、横浜の文化は、文明開化を糧にして、びつくりするほど発展したんですね(笑)。

嵯峨 横浜の人っていうのは、結構、横浜の自慢をする(笑)。横浜の浜っ子だという。みんな、市歌を歌えますよね。僕は歌えません。

吉野 実は、私も歌えない。たぶん横浜市立の小学校で強制的に教える。そうでないと、子供たちも歌えないんじゃないかな。だんだん話が、わけがわからなくなつて……(笑)。どうもありがとうございました。私自身は、横浜で生まれ育っているのですが、あまり不思議に思わないのだけれども、外の方の目からみると、不思議なところもあるのかもしれない。

津金規雄さん、いかがでしょう。

津金規雄 今回のこういうテーマは、僕たち自身のなかで、横浜ってなんなのかなって考えるいい機会だと思う。その一つの考え方として、東京に対して横浜ってなんなのかなと思うんですね。僕は、専門が妙なもので歌舞伎で、歌舞伎座がなくなり、いまは新橋演舞場ですけれどね。結局あそこにはいかなと歌舞伎はないわけで、横浜って歌舞伎をやつてくれない。こんなに近いのにそういう劇場がない。音楽ホールですけど、みなとみらいホールだつて出来て十二年。東京にサントリホールなど、あれだけたくさんホールがあるのに横浜に全然ない、そ



津金規雄さん

ういうことを考えると、いまものすごく偏った文化的な話をしましたけれど、やっぱり東京と横浜というものを考えると、一つ何か見えてきて、ちよつとわからないんですけれども……。そんなことを考えさせられて、とても、きてよかったなと思います。

吉野 ありがとうございます。文化的なことについてお話がありました。横浜は東京をうまく利用している部分がある。東京と距離的に近いので、東京があれば横浜になくても、そういう文化的なことを含めて利用できるという発想が街づくりのなかであつたのではないかと思います。

私は大学が福岡だったのですが、こんなにたくさん大学があるんだと思つたんです。たとえば文化的なもの一つとして大学というのを考えたとき、横浜は福岡より都会だけれど、その数が少ない。必ずしもすべてということではありませんが、他の地方都市に比べても、文化的な面で、施設の数だけでなく、システムのなところでも少ない。それも、横浜の特色になつているかもしれないですね。いろんな歴史的なものが豊富に在る、観光地なども豊富に在る、というイメージがあるのですが、ちよつと視点を変えてみると、意外と少ないものもある。そんな点も横浜の特色であり、不思議な点かもしれません。**小島熱子** 今日きて戸惑つたのは、横浜らしさってなんだろうと。私は横浜にきて四十年になるのですが、自分にとって横浜は、別の土地という感じがあります。桜井さんのジャンルの組み方は歴史、風土・風景ととてもいいと思つたんですが、作品をつくる場合、横浜は広いし、自分の知っている周辺でしか作品をよむことはできない。そうした作品が、横浜らしさとして、一般化し、定着してゆくのかかわらない。

吉野 ありがとうございます。会場からも、横浜らしさを議論するいろいろな視点を提示していただきました。桜井さん、いかがでしょう。横浜らしさを明らかにするヒントのようなお話があれば…。

桜井 あの非常に、難しいところだと思うのですが、横浜らしさという、そのらしさをどういうふうに捉えるか、まさに風土であるとか、時間であるとか、あるいは土地に居住する人の気質、人情であるとか、どういうふうに絞ってゆくかで、全然話の発展が違ってくると思うのですけれど。私の場合は歴史、風土・風景という切り口で、やや強引でありましたけれど、それぞれ分けてきました。一つの横浜らしさとして、共通して見出せるものは、なるほど思っていたのですが、石川さんが話された、変化してゆくことを含めて、それを受け止めてゆくというのを、ある種の横浜らしさと、私も思うのです。横浜は一五〇年くらい前に開港し、それ以前の歴史というのは確かにないですね。吉野さんが、横浜は学校の数が少ないと。福岡はまさに城下町ですごくプライドをもって、藩校などをもち、教育文化がものすごい。横浜は一五〇年前にボツとでてきて、外国人がやってきて…、街を築いてきた。

野崎 というか、全国から商人が、横浜の港を目ざして集まり、そこで商売をしたわけですよ。ですから、横浜の土着の人間が商売したのは、ほとんど全部失敗したと（笑）。ほうぼう遙か彼方からきた商人たちと、横浜の農民が対抗できっこないじゃないかと。だからおとなしく土地を耕していた人は、先祖代々土地を守ってきたけれど、そこで商売した人たちは全部失敗したねと、横浜生まれの母がよくいっていました（笑）。

桜井 外国人や日本国内からきた人たちが、横浜の

歴史や町を築いてきたということですよ。そういう意味では、横浜は非常に刻々と変わってゆくような町ですから、変化してゆくものに柔軟に対応してゆく、良くも悪くもそういうところがある。アンソロジでもみなとみらいをうたったものが非常に多く、ほとんどの歌が変わりゆく横浜の街を肯定的に受け止めているわけで、それを否定的に人工的な街じゃんかと、ある意味で気骨のひねくれ者はいない（笑）。柔軟性に富んでいて前向きにというところの一つの横浜らしさ、まさに気質の部分だと私は思うのです。

また、石川さんのいわれた軽さ洒脱さに通じるところがあると思うのですが、「立小便するなと書かれし札のありバンザイ さげぶその谷底へ」（岡部桂一郎）。軽やかにうたっているが、軽薄でなく、そういう洒脱さを受け入れてゆくのが横浜の土地にあるのではないかな。また、斉藤要三郎さんの作品には、ほとんど口語で統一されているのだけれども、文語体のようなところもあって、「風の音にぞおどろかれぬるひけらかす、ぬるつてなあに言はなきやいいに」などに、人つて奥行きがものすごくあって、深い奥行きをなかに覗いてしまったような、人の心というものが、口語表現、ある種の会話表現のなかで隠されている。「これやこのペンペン草の旧居跡 負けじものころ草もばうばう」は、ご自身の重みをもって境涯詠の形で現わす。逆に軽さのなかに変換されて表現する。それが、もしかしたら必要だった。むしろ横浜らしさ、何でも柔軟に受け入れて、自在に表現してゆく。この歌人の気質、気風として、軽さ洒脱さというのが、一つの横浜らしさというところがあるのではないかと思います。

小島 作品は、すばらしいと思いますが、それが横

浜の市民性まで広げて、普遍的なものまで捉えられますか。そこが、難しいところだと思うのですが。

桜井 まさに、そうなんです。そういう洒脱さというのはある種の方法意識を取り込んでいる。横浜らしさになるかもしれないのですが、この方も果たしてそうなのかということを私が断言してしまうとリスキーなことで、たとえば斉藤さんの歌なんですけれど、横浜を舞台として、そういう素材を通してみた場合に、横浜らしさとして捉えてみたいというところで、この歌を引用させていただいた。回答になっているかわからないのですけれど。

角宮 斉藤要三郎さんは、「はな」の会員で、この人は中華街の長屋で生まれたのかな、育ったのかな。戦争戦後の体験も経て、それから危ない橋も渡っていたらしい。そういう感じもするのですけれど。本牧にお家があつて、今度は年をとったので、ご夫婦でマンションに入ったんですね、そこに女優さんがたまたまいて、嬉しく（笑）暮らしている（笑）。この人とお話していると、横浜庶民のしたたかな、人間のしたたかさを感じます。決してそれを重々しくでなく、シニカルにうたつて。

吉野 ありがとうございます。たとえば横浜の一つのイメージとして、港、海、坂がある。では神戸、函館などはどうなのだろうか。それから、軽さや洒脱さといったものも横浜だけのことでなくて、別の土地に生活していても当然ありうることで…。そうすると、われわれが考えようとしている横浜らしさというのがなんなのかという根本のところに関心が戻ってしまう。と、非常に厳しいところに行く。でもやはり、横浜らしさ、横浜らしさがもっているものが、何かあるのではないか。

少し難しいところというか、問いが戻ってしまっ

たところでマイクを渡されるのはきついかもしれません
せんが、石川さん、いかがですか。

石川 そうですね。最初に題をいただいたときに、まだ歌集を読んでいなかったもので、私のなかの横浜らしさってなんだろうなと考えたときに、吉野さんじゃないんですね、ないなあと思ってたんですね。そういうの拾えるのかなと。自信がないところから、むりやりひねり出したというところもあるのですけれども。さっきもおっしゃっていたように、東京のいいところ取りをしつつ、独自のものを多少は育てているというような、郊外としての発達の仕方と、港町としての発達の仕方と、両方あるというところが、らしさを探りにくくしているところではないかなと思います。でもとくに横浜の、むりやり歴史を高めていこうとか、そういうスタンスでなくとも、別に醸し出されてくるのであれば、それでいいのではないかと、個人的には思います。

吉野 なんとなく醸し出されるのですが、今のご指摘のとおりで、東京に対抗してどうかということはないし、どこにも対抗しないっていうところがある。それがなんでも受け入れるとか、あるいは柔軟に変化してゆくことにつながってゆくと思う。だからこそ、横浜のらしさがなかなか浮かび上がってこないで、とはいえ横浜という、あるイメージを、横浜に住んでいる人たちだけではなくて、やはり他の地域に住んでいる方々ももっている。そういう意味では、横浜という街は不思議な街。捉えどころがないのだけど、捉えている。かといって、その本質がどこにあるかを探っていくと、ふっと逃げてしまうような、そんな不思議な街なのかもしれません。しかし、加藤さんのお話のなかにありました、ある人たちには確かに共有されているのだと思います。

いわれてみると、確かに横浜の人たちは、のんきで、明るいなあ。なるほど…。



写真撮影：田谷幸子

シンボジストの皆さんは、はじめのお話のなかで、具体的な作品をあげるだけでなく、作品の分類などもなさっています。その分類に従って作品を拝見しても、しかしこれで全部がうまく整理されているとは感じない。たぶん苦しい作業だったと思います。そういうこと自体に、ある種の横浜らしさがあるのかもしれない。資料を拝見したり、お話を聞きしたりするなかで、そのようなことを感じています。それがいいとか悪いとかということではないし、また同じ港町として神戸や函館と似ているところもあるし、都会として東京と似ているところもあるし、しかし、東京に対抗意識をもっているわけでもなく、なんともいいがたい、掴みがたい、そんな街として横浜はあるのかもしれない。じゃあ、作品をつくってゆく上でどうなのかというと、何人かの方からお話が あったように、しゃかりきになって横浜の作品をつくらうと思っ て作品をつくっている

るわけではなく、そのなかで、なんとなく、でもやっぱ横浜に生活するなかで、場所の力、そういったもの、あるいは、歴史的なものなども含めたその影響といったものがおのずと作品のなかに反映されていることが当然あるわけです。

終わりの時間が近づいてきましたが、最後に中川さんと角宮さんをお願いしたいと思います。

中川 やはり横浜らしいっていうのは、何かぱらぱらなんですね。一つの形のなかに入っていないのが横浜ではないのかなと思っ ているところがあるんですね。大きくまとめて「らしい」といういい方は、危ないと思うのだけれど。ただ、横浜がある一つのもっている傾向として、新しさというものの着眼みみたいなものがあるのではないかなと思いますね。横浜らしさといっても、そこから私たちは何をうたうのかに興味があつて、じゃあそういった地に住んでいて、私たちは歴史的な時間を意識して、どうやって文化的な力をもつてゆくのか、各人がこれから今日のところを踏まえた上で、考えてゆけたらいいのではないかなと思っ ながら、聞いていました。

角宮 横浜市民は、のんきというのか、明るいんじゃないのかしら。横浜歌人会の人々が明るい、横浜生まれの人をいま思っ 描いても。今日は、横浜らしさをテーマにして考えてよかったと思います。そうかといって、しゃかりきになつて横浜をうたおうとはしないですよ。人生のなかでの横浜として、時の流れのなかで自然に横浜に住んでいたという、気持ちが出るような歌ができればいいんじゃないかな、それでいいのではないかなと。そういう答えが出たのも、今日の会があつたから、そういう気持ちにまとまっていたので、自分の気持ちのなかで認識できたことはとてもよかったと思います。ありがと



平野久美子さん

うございます。

吉野 私の力では到底対応できるテーマではなかったのですが、有意義な会を無事終えることができました。シンポジストのみなさん、会場のみなさんのおかげです。ありがとうございます。

長野 シンポジストの方々、今日は本当にありがとうございます。閉会の挨拶ということで、平野久美子副代表の方からひと言お願いいたします。

平野久美子 お忙しいなか、お集まりいただきまして、ありがとうございます。横浜は確かにいろんなことが雑多な街で、いろんなことにこだわらない、けどちゃんとした文化がないんじゃないかという話のどこかには、横浜という街のなりわいから違うのではないかなと思いました。こんなに横浜のことを考える会ができて、今日はとてもよかったと自画自賛しております。横浜らしさっていうのを書いてた人でなく、読んでくれた読者が感じられるような、そういう街ってなかなかあるようなのね、貴重なのところに住んでいると思うって、これからはがんばりたいと思います。今日はどうも、ありがとうございます。

長野 横浜歌人会らしい挨拶をどうもありがとうございました。

(文責＝事務局)

【後記】

「らしさ」という素朴な響きは、参加者それぞれの横浜への思いを、ゆたかに広げた。

作者の視点に立った作品の読みを通し、「横浜らしさ」を探る方法が取られた。シンポジストの方々のお話を聞きながら、それぞれの横浜へと思いを馳せては、作品の風景のなかに佇むという、心の、行き来を楽しんだことと思う。

いまを生きる人間の、根ざす土地には、歴史を担いつつ、発達し続ける現代がある。そのいまに向き合い、個々の風景を描こうとしてきたことが、全体の討論を通して、より鮮明に意識された。

海へと向かい、丘陵に抱かれた土地柄は、漁民、農民の素朴な営みがあり、「天領」の、その端に位置する自由さを持ち、外からの人々と結ぶ中継地点の役割を担う。開港という、日本の新たな文化の夜明けを発信する土地の位置づけは、その性格をより強く意識させ、方向づけた。

変化するもの／しないものへの敏感な関心は、変化してゆく過程の振り幅のなかで、現在も首都東京の郊外的性格をもちつつ、一つの形にくくられることを拒むような、のびやかな、独自の歩みの上にあることを捉えることができた。

短歌と土地に繋がる出会いのもとに集う横浜歌人会の、新たな船出として、私たちの土地を深く考えることができた貴重な時間だった。

港の公園の、ベンチがみな海へと向けて置かれているように、私たちは遠くからくる風に、そっと心を開いていた。

シンポジストの方々や参加して下さった方々に心より感謝申し上げます。

(高橋みずほ)

◇新会員の紹介

- ・小林 勝 (月虹の会)
推薦者＝千々和久幸、長野義和
- ・津金規雄 (コスモス)
推薦者＝千々和久幸、山本登志枝
- ・嵯峨直樹 (未来)
推薦者＝千々和久幸、吉野裕之
- ・大沢優子 (中部短歌会)
推薦者＝間ルリ、中川佐和子
- ・神谷由希 (中部短歌会)
推薦者＝間ルリ、中川佐和子
- ・桜井健司 (音、E♭)
推薦者＝吉野裕之、高橋みずほ

◇横浜歌人会観月会のご案内

- ・日時 平成22年10月20日 (水) 午後3時～7時
- ・会場 メルパルク横浜
- ・内容 歌 会 (3時～5時) 参加費二〇〇〇円
懇親会 (5時～7時) 参加費五〇〇〇円
- ※ご案内した往復ハガキにより、10月4日 (月) までに、詠草をお寄せください。

横浜歌人会会報 第99号

- 発行日 二〇一〇年九月十五日
- 編集人 長野義和
- 発行人 千々和久幸
- 発行所 横浜歌人会
- URL <http://yokohama-ik.web.infoseek.co.jp/>
- 振替口座 00200-5-77630
- 制作 アトリエ云 / 印刷 野崎印刷紙器株式会社
- このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。